

墨川亭雪麿『傾城三国志』翻刻（六） -第三編下帙-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2018-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19252">http://hdl.handle.net/10291/19252</a>

墨川亭雪麿 『傾城三國志』 翻刻 (六) — 第三編下帙 —

神田 正行

凡例

- 一、仮名は一部を除いて、ひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除き省略した。
- 一、文章を読む順序を示した「合印」(あはしる)は、その多くを形の近い記号で代用した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、「巻(五丁の単位)」ごとに改段を施した。
- 一、見開きが改まる位置には、「(4ウ・5オ)」の形で丁数を示した。
- 一、各人物が初めて、もしくは久々に登場する場面では、原作『通俗三國志』の相当する人物を【】内に注記した。また一部の地名や事物についても、同様の処置を行なった。「▼」印以下は、稿者による注記である。
- 一、影印ならびに翻刻の底本には、早印本と思われる明治大学図書館(江戸文芸文庫)蔵本を用いた。

《第三冊 表紙》



傾城三國志三編 下帙上冊  
 癸巳新刊

袁術 【▼駒絵内。中央は本作の色彩】  
 雪麿作 国貞画 喜鶴堂梓

《第三冊 前表紙見返し》



雪麿作  
 まだうつろはぬ菊川に 年増盛の色香ある 柏木が管待ぶり

傾城三國志三編之三

国貞画  
 慙忍の名を天下に流すは 瀬々にみなぎる 滝夜刃が不仁行

▼中央の題号は濃墨。左右の地に薄縹色を使用する。

(五)

滝夜叉はせん術すべなさに、「今我々は目をつけられて、捕らへられんとするものなれば、いづくにもせよ心なく、久しく留とどまることをせず」と、言ひ捨ててゆくを柏木が、「妾めかけいさゝか真心もて、僕しもに命じ若鶏わがの、かしわを料理て肴となし、酒を勧めて二方を、もてなさんとしたりしを、無下にし給ふは何事ぞ。我が一夜ひとよさの宿りをば、争ひ給ふことかは」と、恨むを耳にも聞き入れず、背そむの方は



(21才 滝夜叉、柏木を斬らんとする)

見返らで、ますく足を速めしが、五足もも六足歩むうち、

滝夜叉はたばさみし、刃をひらりと引き抜きて、引提ひきげしまゝにたちかへり、柏木を斬らんとす。月夜ながらも影曇り、定かに様子は見え分かねども、それと悟れば宮居は慌て、声を低うしおし止め、「やよ過ちなし給ひそ。彼には何の罪かある」と、支えし手もとを緩ゆるさねば、滝夜叉も小声になり、「柏木我が家にたち帰り、家内やうちの

〔上より〕死人を見る時は、御身みたりと一人の仕業しわざなりと、やはか悟らでおきなんや。しからばたちまち我々を、此まゝ見逃すいはれなし。これ禍わざはひのもとなり」と、言ふを打ち消し宮居が言ふやう、「こは御身みたりにも似合はざる、言葉をは聞くものかな。目前父の側女そばめならば、御身がためにも親しき仲なり。そを殺さんとは何事ぞや。殊ことに以前は知らずして、殺したれば是非もなし。今はそれと知りながら、殺すはいたく不義ならん」と、次へ(21才)／

〔続き言へば〕滝夜叉あざ笑ひ、「よしや妾は天下の人に、背くとも天下の人の、妾に背くことをやめん」と、言へば宮居はひと言の、応こたへもなく黙然たり。■／■滝夜

(21ウ・22オ 宮居 滝夜刃殺害をためらう)



刃がこの一言は、その残忍をあらはして、後々までも人のために、罵り譏らるゝはしなりけり。▲

▲されば宮居は滝夜刃を、なだめて共に行く道は、巷里あまりも来たりしが、互ひに交はず言葉もなく、月は限なく冴え渡るに、滝夜刃宮居に相談して、とある旅籠屋の門うち叩きて、ひと夜の宿りを求めつゝ、二人ともにひと間に至り、少しの酒を酌みかはし、宵の疲れを休めしが、滝夜刃肘を枕にして、転、寝をしたりしに、宮居はひとり、思案をするに、「滝夜刃は、世に稀なるべき賢女なりと、思ひとるまゝ、宮仕への、道をも捨ててこの人に、つきてこれまで来たりしかど、邪険無慙の女なり。我いつまでも此人につきて、おらんは甚だよろしからず。後はた如何なる憂ひをば、引き出ださんも測りがたし。今此女をたゞひと打ちに、討つて捨てなば我のみか、天下のためにも妨げと、なるべきものゝ根を断つ道理、しかなりく」とうち頷き、秘かに刀を引抜きて、滝夜刃が頭をのぞみ、すでにその手を下さんと、したりしかども「待てしはし、妾は国家の為にもと、彼に

つきたるばかりなり。今彼を殺すは義ならず。こは彼をうち捨てて、我のみ一度故郷に帰り、親夫にも会はんにかかず」と、胸を極めて刃を収め、そこ〜に身支度なし、人知れず立ち退きしが、いまだ夜明けに至らねば、「夜の間」に道を稼がん」と、故郷さして急ぎけり。

こなたには滝夜叉姫、宵の疲れのそが上に、少しの酒に眠気ざし、心ともなくまどろみし、夢は馬屋の鈴の音、嘶く馬の声に破られ、頭を上げてかたはらを、見れば東の明かり窓、はや白みたる有明の、行灯のみぞ残りぬて、宮居は影だに見せざれば、「我此ごろの疲れにて、思はずまろびし肘枕。熟睡せし間にかの女は、我を外せしものなるべし。彼我が言葉を不仁と疑ひ、逃げ出だせしも測られず。我もまた此ところに、久しく止まるべきにあらず。少しも道を急がん」と、やがて支度を整へて、夜を日に継いで急ぎしかば、程なく故郷次へ（21ウ・22オ）／続き猿島に、帰り着きて館に入れば、親姉妹はいふに及ばず、腰元はしたの者までも、まつその無事を喜び聞こえ、又いかにして以前のごとく、数多の従者をも

召し具さず、帰り来たれるよしを問ふに、滝夜叉姫はかやう〜と、過ぎ来しかたり、▼「の」カ】物語を、詳らかにもの語り、さてその後は人を遠ざけ、秘やかに語らふは、「妾つらく思ひはかるに、此度家に蓄えたる、金銀米銭をことごとく、散らして諸方の女兵を招き、董根を討ち滅ぼし、その勢ひをもてあはよくは、世盛りなりける、藤原時平一家を平らげなば、やがては天が下をも握るは、瞬く内にあらずや」と、席を叩きて説き示せば、妹なりける桔梗姫【曹仁】、菖蒲姫【曹洪】もろとも、「いとしかるべき事にこそ」と、うち喜ばば母君なる、高峰前【曹嵩】は眉根を寄せ、「そはよき企てなりけれども、金銀の助け少なき時は、うまく事をばなしえがたし。汝が乳人なる、印麿の阿沼蘭【衛弘】といふもの、夫は世々の分限にて、彼この館に奉公して、殿良将主はさら也、妾も共に恵みたる、恩を受けしはいくばくならん。さる間彼にはかりて、金銀の助けを得ば、事は果たして成るべし」と、母が教えに滝夜叉姫、喜ぶこと大方ならず、その日使ひを走らせて、乳人阿沼蘭を



(22ウ・23オ 阿沼蘭、滝夜叉に同心する)

呼ばするに、故主の仰せ重ければ、取るものも取りあへず、奥館に入り来たる。

滝夜叉は妹 姫らと、共に酒宴を開きつゝ、阿沼蘭が来たるを待ちつけて、滝夜叉はまづ阿沼蘭に向かひ、互ひに無事にて喜ばしき、よしを告げたるその後に、杯を上げ酒を勧めて、さて物語りて言ひけるは、「今都にて東の御殿は、まだいわけなき姫御子の、主となりてまし〜つ、董根専ら我意を振る舞ひ、御殿を奪ひ諸人を、苦しむれども誰ありて、これを支ゆる者もなく、▲右へ／

▲左より 歯を食ひしぼりて手を空しく、眺め暮らすばかりなり。わなみこれを憤り、思ふこと甚だしく、いかにもして董根を、滅ぼしなと思へども、只恨めしきは力足らはず。おことは常に我が家に、ちなみあるのみならず、真心厚き性なれば、此ことを告げて手助けと、なさんと思ふはいかにかあらん」と、問へば阿沼蘭は膝おし進め、「よくこそ思し立ち給ふ。■／■さすがは親父良将公、ならばびて兄君将門公の、武勇を受け継ぎ給ふにや、御心猛く御思量逞し。妾も及ばぬことながら、此ことを



(23ウ・24オ 滝夜刃の親族集う)

思はぬにはなけれども、力を合はせん人もなく、ことに卑しい賤の身なり。都とこゝとは遠く隔り、とても及ばぬ事也と、うち捨ておきしに姫君たち、はや此大事を企て給ふは、願ふてもなき天下の幸ひ。夫に勧めていくばく金の、軍用を送りまらせん」と、答ふる言葉潔ければ、三人の姫はうち喜び、**次へ**（22ウ・23オ）／**続き**「しからは東の御殿よりの、おん下知下れりと披露なし、董根追討のことを告ぐる、巡らし文を諸方へ出だし、義兵を招かん」と言ひ合はして、忠義の二字を筆太に、下給の国境に立てぬれば、これを見て集まり来たる、女房の数多ある、そが中に滝夜刃姫が、兄なりける大葦原四郎、将平が妻常夏【夏侯倅】、それが妹岩淵【夏侯淵】姉妹、数多の勢を引き連れ来たれば、しりへに従ふ女房二人、信楽【楽進】・玉蔓【李典】と呼びなしたり。皆馬をせめ槍を使ひて、戦の用意大方ならず。

さる程に印旛の阿沼圃は、家の財を出だし尽くして、鎧兜旗差物、陣羽織小袴まで、みなことごとく買ひ調へて、持たざる者にはこれを与へ、その他兵糧を運送す

ること、かつてその数をはからず。こと大方に不足なければ、集まる勢を一つになし、木曾路よりおし上り、近江国醒井に、屯を構へ諸人の、馳せ至るを待ちてをり。

こゝにまた初糸【袁紹】は、先にも説きおけるがごとく、本院の大臣、時平公の御弟、仲平公のうまごにて

【▼本稿(四)】の系図参照。本誌第五二二号六五頁、

都に住まひせしかども、滝夜刃姫が東の御殿の、御下知を受け忠義の戦を、起こす由の文を見て、「おのれも東の御殿にとりては、由縁なきにもあらずして、殊にさる頃董根が、東の御殿を傾けんと、するの兆しを悟りぬれば、彼と言葉争ひを、なしたる事もあるのみならず、もとよしかの董根を、討ち滅ぼさんの心あれば、たちまちおのれが手につきたる、者を招きて此度のことを、計るが中に、出来秋の豊田【田豊】、赤紫の組交【沮授】、月碓の手杵【許攸】、海上山椎柴【審配】、割床の臥猪【郭図】、黄昏の夕顔【顔良】、金蒔絵文車【文醜】

▲左より なんと、いふ者あり。みなことごとく滝夜刃が、招きに従はんと評議を決して、数多の手勢を引き連れて、

近江路へ馳せ下り、滝夜刃姫が手に加り、△/△戦評定とりぐなり。

その余諸方より集まる者には、初糸が妹色糸【袁術】、躬恒の妻笹の前【王匡】、貫之の妻橘立御前【喬瑁】、肆の鮑【鮑信】、古琵琶の四結【孔仙】、若竹の節根【韓馥】、遠山の黛【劉岱】、唐文の文卓【張邈】、夏陰の道水【袁遺】、鬚括文亮【孔融】、近江路の弥高【張超】、伊万里焼陶野【陶謙】、御茶漬の寿【馬騰】、金目貫曾我菊【張揚】、純友の母堅田【孫堅】、色糸の姉次へ(23ウ・24オ)／続き初糸らなりけり。皆はるぐの所より、此地へ来たりて滝夜刃が、手に加るそが中に、通神玉章【公孫瓚】は加賀の国、篠原の者なりければ、手勢を引きて近江へ来たるに、越前国三国を過ぐ。しかるにはるか向かふを見れば、桑の木ひとむら茂りたる、小山を野風炉・茶弁当など、とり持たして遊山なし、慰む者ありけるが、■/■玉章を見ると等しく、みなひたぐと此方に来たりて、一列に拜伏しぬ。玉章これをつらく見れば、大桑の玄妙【劉備】なれば、玉章は身



(24ウ・25オ 玉章、玄妙と再会)

を進め、「こはくいかに」とばかりに、絶えて久しき  
 対面を、喜び聞こえしその後、に、「御身いかにしてこゝ  
 にをはする。その由聞かめ」と訝れば、玄妙につことう  
 ち笑みて、「玉章姉御は忘れ給ふや、妾さる頃此ところ  
 の、寨一つを預かりて、はやいくばくの日ごろを経たり。  
 今日しも暇あるまゝに、村々をも見がてらに、そゞろ歩  
 きをするになん、たまゝ姉御にあひ会ふて、喜びこれ  
 に増すことなし。つきては御身幸ひに、妾が守る寨に來  
 たり、まづ諸人をも懇はし給へ」と、勸むれば玉章は、  
 関路【関羽】・飛鳥【張飛】を指さして、「かしこの二人  
 は何人によ」と、問へば玄妙答へて言ふやう、「彼らは  
 関路・飛鳥とて、妾と義を結びたる、兄弟にて侍るなり」  
 「しからばさる頃御身もろとも、黄巾の賊婦らを、討ち  
 破りたる人々なるや。見申せばいさゝかの、官位も  
 なしと思はる。あはれよき姫たちを、空しく埋み置きな  
 んこと、恨みの第一なりかし」と、玉章が挨拶に、玄妙  
 はかの二人の、女を呼びて対面さするに、玉章が又言ひ  
 けるは、「汝たちもほの聞かれけん、下へ 上より今董

根御殿ねごどのに入て、あぎやうむりやう【▼「悪行無量」カ】を働くものから、世の中いたく乱れつゝ、もろくの女房たち、彼を誅せんと思ふになん。おことらもかすかなる、俸禄に縛られて、この塞にをらん【▼「より」脱カ】、むしろこゝをばうち捨てて、妾と同じくかの賊婦、董根を討ち東の御殿ごどのを、助けんにしくことあらじ。此こといかに思すにか」と、言へば玄妙一議もなく、「そもとよりの願ひなり。苦しからずは伴はれん」と、言へばかたへの閑路と飛鳥、口を揃へて言ひけるは、「玉章ぬし我が輩ともがらも、従ふことを許し給はゞ、かの賊婦董根とうこんが、首引き抜きていさゝかの、次へ (24ウ・25オ) / 続き功いさををあらはし今日けふの上の、賤しきを逃れん」とて、すぐさま寨にたち戻り、そこく用意しつ、玄妙・閑路・飛鳥らは、数多の手勢を引き連れて、玉章に従ひて、近江路さして至りけり。

それはさておき滝夜刃姫が、招きによりて諸方より、来たり集まる女房らは、すべて十八頭じゅうはちがしら【▼「十八鎮諸侯」にて、陸統として引き続き、広き馬屋の醜みにが井も、

鎌を立つべき寸地もなく、おのく持ち場くを預かり、幕うち回し飯屋を構へ、戦ひの用意大方ならず。滝夜刃喜びに堪へずして、それくの持ち場にのちい行き、めいぐに挨拶なし、しかして後に諸々の、女房らを一につに招き、酒の筵じりょうを開きつゝ、戦を進むる謀はかごとを、はからふ中に躬恒の妻、筐かたみの前が席を進みて、「今かく大事を起こさんには、必ず人の器量を見て、頭かしらたつ者を立てて、これを総大将とあがめ、わなみをはじめ諸々の、■ / ■女房たちもかの人の、指図約束を聞入れなん。しかして後のちに進まねば、おのくおのれくが、心々になりもてゆき、戦いくさの手つがひよろづにつけて、たより悪しからんと思ふはいかに」と、理をせめ言葉淀みなく、言へば数多の女房らも、「此こともつとも理ことばりあり」と、答へながらもへりくだり、相互あひあひにおし譲りて、誰たれよからんと言ふ者なし。その時

六の巻へ (25ウ)



(25ウ・26オ 勇婦ら、盟主を選ぶ)

(六)

五の巻より滝夜叉あたりを見回し、「これにをはする初糸ぬしは、琵琶の大臣仲平の、うまごにして東の御殿に、ちなみも深き人なれば、挙げて総大将となし、此人の下知を聞かめ」と、言へば初糸恥じらひたる、面持ちにてさし俯き、「こは思ひもかけぬことなり。身不肖なる妾などが、各々の上に立んこと、上へ下より思ひもよらぬことなり」と、二度三度おし譲るを、数多の女房かたへより、「初糸ぬしにあらざりせば、誰か又これに当たらん。ひらに受け入れ給へかし」と、勧めに初糸詮方なく、まづその勧めにうち任し、その次の日にうち開けたる、ところを見立てて、三段の壇をつきたてて、あたりにひしと小旗を立て、上には白き旗、黄なる斧を立てたりけり。初糸衣服を清らにして、腰に長き刀を佩き、此壇上にうち上り、香を焚き拜をなし、謹み告げて申すらく、「東の御殿幸ましますと、董根権を専らにし、いともかしこき方様に、禍加り国民には、毒流れて苦しみぬ。国の掟は絶え廃れ、次へ(26オ)／続き宮寺は



(26ウ・27オ 初糸、総大将となり天地を拜す)

傾き危うし。今初糸諸人と、共に大義を企てて、世を安らかにせんと欲す。およそ誓ひを同じうし、心等しく力を合はして、もてその守る所を尽くさん。もしまた誓ひに背く者あらば、天人ともに誅すべし。御霊姫靈おはさば、肺腑を照らしをはしませ」と、言ひ終はりて諸人と、血をすゝり誓ひをなせば、壇のもとに並みあぬる、数多の女房身の毛を立て、齒を食ひしぱり小躍りなし、おのゝ董根を討つて取り、東の御殿の安からん、ことを思ふのみなりけり。

やがて初糸壇を下れば、みな手を取りて下へ上より設けの席に、助けをらせて礼をなし、少しく官位に従ひ、年の齢のほどに習いて、二ながれに居並びたり。滝夜刃やがて指図なし、酒肴を持ち運ばせ、杯を巡らしつゝ、座中に向かひて言ひけるは、「今日しもかく、総大将を立てたる上は、誰々もその人の、言ひ付けを守り自らが界を、争ふことを慎めかし」と、言へば初糸かたはらより、「我が身諸人の、思はん程も省みずして、勧めに任せ、  
▲左の上へ  
▲右の下より総大将となりにたれば、

黜いさまあらば必ず褒めん、罪あらば罰せざらんや。国には常  
 の戒めあり、戦いくさに定まる掟あり。汝なんたちこれらを合点がてん  
 して、必ずな犯し給ひそ」と、懇ろに言ひ諭せば、諸人ら  
 一同に、「いかでか旨に違たがはんや」と、言ふに初糸再び  
 言ふやう、「我が身が妹いも色糸に、兵糧まぐさ馬草うまぐさを掌つかさど  
 陣屋々々に配らしめて、これらにことは欠かせまじ。誰たれ  
 にもあれ先手まゝとなりて、直たに相坂あふまかの関に至り、ひと手を  
 もつて敵に向かひつ、余はみな各々險しき場所に、陣を  
 張りてかのひと手と、応ずる事を旨とせん。誰たれか諸うべなひ給  
 はんや」と、かたはらを返り見れば、伊予の掾せう純友が、  
 母の堅田かたは進み出で、「我が身才は足らねども、先手まゝと  
 ならんは願はしけれ」と、言へば初糸喜びて、「御身は  
 勇氣逞しければ、此役目こそ相応しからめ。つきてはこ  
 れなる次つぎへ（26ウ・27オ）／＼続き杯を、まづ御身に参ら  
 して、その門出かどいを祝さん」とて、さす杯を堅田は干ほして、  
 それより己おのれが持ち場に帰り、しきりに戦いくさの用意を整へ、  
 勢いきほひにうち任し、相坂の関において至れば、関守厳しく  
 関を守りつ、早馬をもて此事を、東山なる董根に、とく

告げ知らせたりけるが、董根権を振るひし後は、日ごと  
 に酒宴を設けつゝ、夜は更こつた闌けてやみにけり。

かゝる所に相坂の、関より早馬到来して、急を告ぐる、  
 告げ文がみをもたらしたれば、杏からも【李儒】これを受け取りて、  
 急ぎ来たりて董根に、そのことを申すにぞ、董根驚く事  
 大方かたならず、急に数多の女房らを、召し集へて言ひける  
 は、「今初糸・滝夜刃ら、諸方の女を集へ集め、にはか  
 にことを起こしつゝ、その手の軍兵ぐんべう相坂の、関のあなた  
 に来たりといふ。汝なんたち何の妙策ありて、此軍兵を追ひ  
 退しりぞけん」と、言へる言葉の下よりも、玉川の調布たうふ【呂  
 布】は、身を進めてうちほう笑み、「母人さのみな気を  
 揉み給ひそ。わなみ関のあなたなる、女兵をうかゞひ見  
 る所、塵か芥のごときのみ。我が身自ら兵つはものを、引きて彼  
 らが頭かうべを斬り、獄門の木にさらさん事、我が身が願ふと  
 ころなり」と、言へば董根喜びて、「我に御身のあるも  
 のから、枕を高く眠らんのみ」と、言ひも果てぬに調布  
 が、背そむらの方より進み出づる、二八ばかりの一人ひとりの娘、  
 容かたちには似ず声高く、「鶏を裂くに■／＼■いづくんぞ、牛



(27ウ・28オ 華籠、出兵を志願する)

の刀を用ひんと、いふ諺のあるぞかし。調布ぬし必ずしも、御身が手を下すに及ばず。我が身数多の敵將の、頭を斬るを見ることは、袋を探りて物を取るのみ。さは思さずや」と広言吐くに、○右へ／＼○左より董根そなたをうち見やれば、ひきもの華籠【華雄】とて、名に聞こえたるお転婆娘、口も八丁手八丁、大津わたりに鳴り響く、金棒引きの骨頂なり。董根喜びとりあへず、【李補】・夕月【胡軫】・一本【趙岑】の、三人を添へて華籠に、数多の手勢を預けつゝ、相坂の関に向かはしむ。

それはさておき此方には、諸方より集まりたる、女房のそが中に、肆の鮑が、おのれつらく思案するやう、「此度先手の大将と、なりたるは堅田なり。彼もし大功をあらはさば、全てわなみは埋もれ木の、花咲く手柄をなしがたからん」と、思慮をめぐらし秘やかに、【次へ】(27ウ・28オ)／続きおのれが妹 簀虫【鮑忠】と、いへる者に手勢を預け、脇道より抜け駆けさせ、たゞちに關所の左へ／＼右よりもとに至らせ、戦ひを挑ましむ。あなたには華籠が、兵 数多従へて、簀虫と向かへ戦ひ、お



(28ウ・29オ 華籠、糞虫を討つ)

めき叫んで言ひけるは、「やよ糞虫の弱虫め、我と勝負を決せんとは、飛んで火に入る夏の虫、自業自得に命を失ひ、音にのみ鳴くとも及ぶまじ」と、嘲り罵る広言を、聞怖ぢなしたる糞虫は、踵をめぐらし退くを、「やらじ」と華籠追ひすがり、きらめく刃を振ると見えしが、糞虫が素頭は、飛んで地上にまるびけり。華籠は此勢ひに、乗りて多くの兵を、あるひは▲右の下へ▲左の上より生け捕りあるひは斬りとり、使ひを立てて糞虫が、首級をもたらし董根に、献じて手柄をあらはせば、董根これに恩賞を、重く与へしのみならず、また兵を増し与へ、なをこの関に留めをらしつ、「敵地へ踏み込み敵兵を、軽しむることなかれ」と戒む。

さればまた、伊与の堅田は、四人の女将を従へたり。一人は冬川の行舟【程晋】とて、一筋の長槍を使へり。次は秋山の黄葉【黄蓋】とて、鉄もて作れる鞭を使ふ。次は春雨の海棠【韓当】とて、ひと振りの、長刀を手練なす。次は夏木立茂枝【祖茂】とて、両刀使ひの達人なり。堅田がその日のいでたちは、白銀の小鎖もて、綴り

(29ウ・30オ 行舟、夕月を討つ)



なしたる腹巻に、丈なる髪を振り乱し、赤地の錦に、鉢鉄入たる鉢巻き締め、手には氷の刃を握り、関の方を指さして、大音に罵り言ふやう、「悪を助くるおのれが輩、何ぞ早く降参せざる。下れく」と仕掛くる喧嘩、聞いて怵へぬ華籠が、次へ(28ウ・29オ)／続き副への大将夕月は、華籠にうち向かひ、「あれ聞かしやれや、あの雑言、願ふは我が身かしこに至りて、あの一の女郎才を、二ツになして今こゝに、立ちたる腹を癒さんと、言ひつゝ、関の戸押し開かし、まつしぐらに駆け出です。堅田はこれをうち見やり、自ら切つて出でんとするを、出だしもやらず行舟が、槍をひねりて突いて出で、夕月と渡り合ひ、戦ふこと数合に及ぼす、行舟は夕月が喉輪を目当てにたゞひと槍、突けば倒るゝ仰のけさま、首かき落とす心地よき。かゝる折しも関の方より、射出だす征矢は雨あられ、行舟こゝを引退き、堅田と共に

■／兵を、まとめてもとの陣所に帰り、堅田は使ひを遣して、醒井なる初糸の、ところ今日の勝ち戦の、様子詳しく言ひやりつ、しかのみならず色糸に、ついて

「兵糧を送れかし」と、懇ろに促したり。しかれども、人ありて堅田が右へ／＼左よりうへを、さかしらして言ひけるは、「堅田は伊与に人となりて、大掾純友の母にして、四国においての猛き虎なり。勢ひあたかも当たるべからず。今もし董根を討ち滅ぼすとも、まさしく狼を避け除きて、又虎を得るに似たれば、此度糧米の運送を、いかほどに催促なすとも、一粒も与ふべからず。しからば彼は必ずしも、敗れんこと疑ひなし」と、言へば色糸

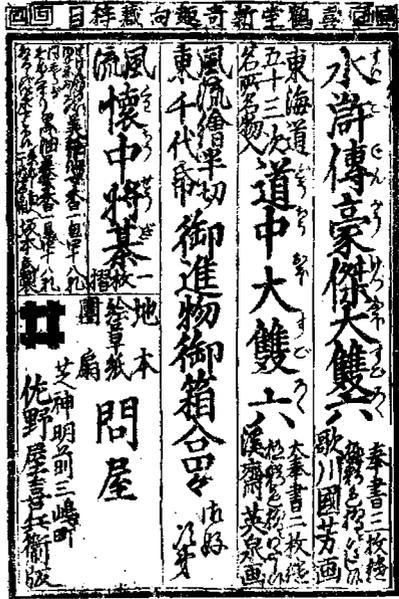


(30ウ 華籠、海棠を追う ▼右上に「もみぢは」)

聞入れて、糧米を發せねば、堅田が陣は兵糧少なく、自づから乱るゝ様に、堅田はしきりに氣をいらち、催促すること二度三度、されどその甲斐なかりけり。

風は華籠と、共に商議してはいはく、「我一手の次へ(29ウ・30オ)／＼続き軍兵を、引て小道を探り求め、それより堅田が陣所の後ろを、襲ひ撃たんと思ふ也。御身夜半の頃に至らば、秘かに堅田が陣に赴け。差し挟んで討ち取るべし」と、言へば華籠「そはよからん」とて、しきりに馬に馬草を飼い、軍兵には兵糧を与へ、用意すること大方ならず、しかもその夜は月白く、風清らかに吹き通ひ、堅田が陣所に至る頃ほひ、すでに■／＼これ夜半なり。鬨を作り鼓を鳴らし、直ちに攻めに攻めたつれば、不意を打たれて驚く堅田、慌てながらも鉢巻き締め、刀を舞はして切りめぐるに、華籠に行きあふて、戦ひ数合に至らぬうち、背の方にて鬨をあげ、風が軍兵ども、たて挟んで火を放てば、堅田が上のかたへ／＼下より軍兵糧を絶やせば、自づからしどろに乱れて、○／○危ふさ限りなかりけり。

《第三冊 後表紙封面》



▼奥目録「喜鶴堂新奇趣向蔵梓目」。前年のものと  
同内容。

《第四冊 表紙》



癸巳新刊

公孫瓚 ▼ 駒絵内。中央は本作の玉章

雪麿作 国貞画 喜鶴堂梓

傾城三国志三編 下映下冊

《第四冊 前表紙見返し》



通れ堅田の危急を救ふ 忠義は比ひ夏木立  
しげり枝がとり替たる 赤憤の赤心

雪麿作

けいせい三国志三編の四

温酒の冷ぬ間に ひゆる氷 刃の庖丁  
仇を膾に関路が手料理

国貞画

▼題号・編次に濃墨を用い、その背景と作者名・画工名の地に薄彩色を使う。

(七)

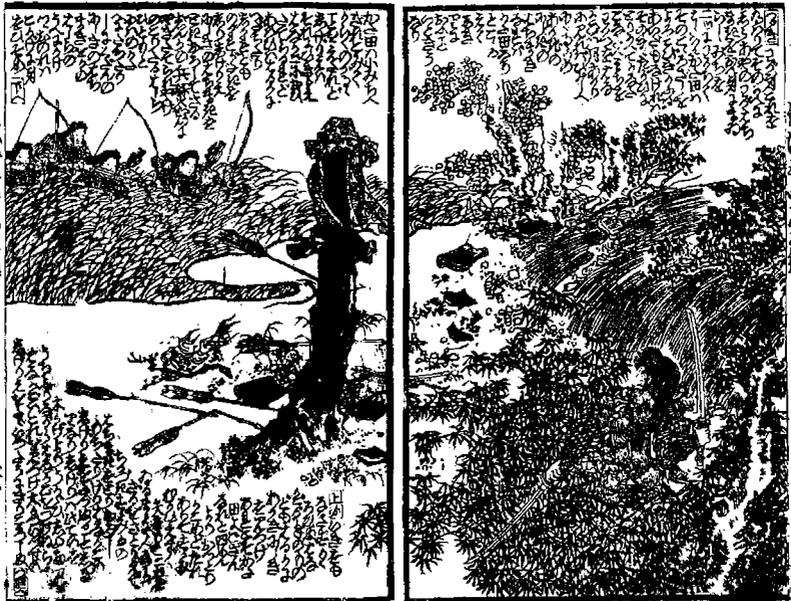
堅田はやうく身を逃れ、走るあたりに喚く声、しばらくも絶へざるに、行舟・黄葉・海棠ら、各々堅田を見返らず、おのれくに逃げ走る。たゞ夏木立茂枝のみ、堅田がしりへに◆／＼従ひて、又五六十人の手の者と、囲みを突いて出でたりしが、後ろより華籠が、追ひ来たるを堅田は帰して、又戦ふこと十余合、堅田は偽り□／＼逃ぐるをば、華籠「やらじ」と追ひかくる。堅田は後



(31オ) 堅田、華籠を狙う

ろを振り返り、続けざまに二条の矢を、放てども華籠が、ために追はれて息たゆく、氣力疲れてやうく／＼に、第三の矢を放つとき、持ちたるを引き折りたれば、弓を彼方へからりと投げ捨て、小笹茅原生ひ茂る、林の内をかき分けかき分け、逃ぐる折まで茂枝は、傍ら去らで従ひたるが、堅田に向かひて言ひけるは、「御身の頭にいたゞき給へる、赤地の錦の鉢巻きは、人目に立ちて敵方に、これを狙ひて射らんこと、いとも危ふき限りにこそ。此鉢巻きを取り給へ。」次へ(31オ)／＼続き我が身これを給はりて、その代へに白綾の、我が鉢巻きを御身に参らし、道を二ツに分ちて走らん。堅田はその志を喜び、着替ふる間もなければ、そのまゝ互ひに取り替へて、かなた此方へ道を分かつを、華籠は月明かりに、見れば東へ逃ぐる者あり、赤地の錦の鉢巻きなれば、堅田なりと心得て、しきりに追ふこといと急なり。

堅田は小道へきれこみて、辛く逃るゝことを得たれど、茂枝はそれに引き替え、華籠に追ひたてらるれど、間は遙かに隔ちたり。しかれども逃れがたきを知り、茂枝錦



(31ウ・32オ) 茂枝、敵を欺く

の鉢巻きを、解きおろしてさる人家の、兵燹へうせんに焼きたてられ、焼け残りたる柱一本、庭のかたへに立ちたりしに、件の錦の鉢巻きを、かの柱の上にかけてつゝ、おのれは木陰に身をひそめ、**下へ** / **上より**息をもなまず隠るひぬ。

華籠が手の者ども、遥かに赤き錦を見付け、「あれこそ堅田よござんなれ」と、四面よりおつ取り囲めど、誰ありて進み向かひ得ず、矢をもてこれを射るに、人ならざるを悟りえて、近付き進みかの鉢巻きを、取りおろし持ちたりけり。華籠は茂枝を、尋ねることしきりなり。

茂 **▼**「枝」**脱** は此体ていを、木陰よりうかゞひ知り、両刀をうち振りながら、華籠をつけ狙ふ。華籠はこれを見付け、大喝一声茂枝を、たゞ一刀に斬り殺しぬ。**次へ**  
(31ウ・32オ) / **続き** 心優しき乙女おとめをば、無惨の刃やいばにかけたたりしは、いと惜しむべき事ぞかし。華籠は夜戦やいくさに、勝ち誇りつゝ兵をまとめて、関の上かみへと引き取りぬ。

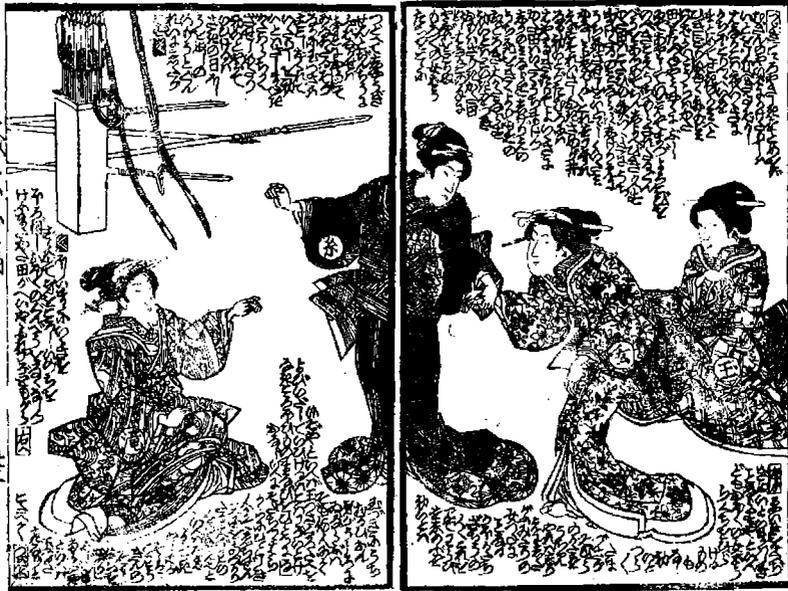
行舟・黄葉・海棠らは、堅田を尋ねやうやくに、無事にてありし体を見て、まづ喜びを述べ聞こえ、討ち漏らされたる軍兵ぐんべうを、集めて陣所へ引き返す。堅田は此度こたびの

夜戦に、うち負けたるのみならず、茂枝に討ち死させしを、いとゞしく悼み悲しみ、しばらくこれを忘れず。

それはさしおき醒井なる、初糸が屯には、早馬来たりて夜戦に、堅田はいたくうち負けつ、しかのみならず茂枝の、討ち死を聞くよりも、その驚き大方ならず、初糸は吐息をつき、「思はざりき堅田ぬし、華籠の手に敗れを取りぬ。諸々の女房たちを、集へて商議せん」と、陣中に触れ流せば、触れに應じて皆至る。そが中に玉章は、少し遅れて至りしを、初糸はさし招き、かたはら近く座せしめたり。初糸やがて言ひけるは、「先の日鮑主の妹、軍令に従はず、■／■ほしいま、に戦を進めて、身を殺し命を滅ぼし、多くの軍兵をなくなしつ。今日また堅田が兵行舟、我が輩右へ／中より鋭気を挫きぬ。いと忌まはしきことならずや」と、言へども多くの女房ら口を開ける者もなし。初糸つらく王章が、背の方をうち見やれば、しりえに従ふ三人の女、常に異なる顔容、座中の人々これを見て、笑ひを忍ぶを初糸は、玉章にうち向かひ、「御身が後ろに居並ぶは、そも何人にて候ぞ

や」と、言へば玉章玄妙を、呼び出だして言ひけるは、「こは我が幼き頃ほひ、もの学びを一つになし、同じ家に育ちつ、姉妹に等しき人にて、越前三国を預かりたる、大桑の玄妙也」と、言へばそばより滝夜刃が、「そは黄巾の賊婦らを、破りし婦人にあらずや」と、言へば玉章「左なり」と答へて、次へ(32ウ・33オ)／続き玄妙を引きあはし、先つ頃玄妙が、黄巾を破りつ、大功ありし事どもを、いと細やかに説き示す。初糸にはかに言ひけるは、「こは大内に由縁ある、苟且ならぬ人なれば、いざ／＼彼処に座し給へ」と、席を設けて与ふれば、玄妙かたく辞退して、「妾はひとりの県守なり。いかにしてか座席の位を、設け給ふの理あらんや」。初糸「いやとよさにあらず。妾御身が名と位とを、敬ふにはあらずかし。御身が曾祖は殿上にて、王子を出でて遠からぬ、いとも尊き人と聞く。◆／◆東の御殿にとりてすら、いたく功ある人なりき」と、言ふに玄妙これを謝すれば、筵の末に連なりたる、関路・飛鳥も手をつひて、玄妙が後ろに座す。諸人商議をするはしに、走り使ひの者来た

(32ウ・33オ 初糸、玄妙を重んじる)



りて、「只今華籠手の者従へ、関をば越えてこゝに来つ、いと長やかなる竿の先に、堅田が戦に締めたりける、赤地の錦の鉢巻きを、突きかけて持ち来たり、此柵外に陣を張り、戦ひを挑み候」と、聞くより初糸怒りを発し、「誰か行きて盗人女と、戦ふ者はあらざるや」と、言へばたちまち色糸【袁術】が、□／□組下也ける河涉【愈涉】といふ女、ものをも言はず駆け出でしが、たちまちに「討たれたり」と、告ぐれば続いて若竹の、節根【韓馥】が手に従ひたる、君代【藩鳳】続いて出でたりしが、これも又討たれにければ、数多の女房色を失ふ。初糸は吐息をつき、「妾が手下に属したる、黄昏の夕顔【顔良】と、金時絵文車【文醜】は、折悪しく方々へ、軍兵催促に出でて帰らず。ひとりもこゝにあるものならば、ほしいまゝに華籠らに、勢ひは振らせじもの。今数多き女房たちの、内にてひとりも華籠が、手に立つ者はなきか」とて、ほとく嘆息なしぬれば、女房たちは答へもなく、口を噤みてゐたる折しも、はるか下座に声高く、「願ふは妾走りゆき、かの華籠が頭を斬り、見せまら



(33ウ・34オ 華籠、敵陣を望む)

せん」と罵りて、幕のもとに立ち上がる。次へ(33ウ・

34オ)／続き初糸「彼は誰にかある」と、玉章に問ひた

るに、玉章「彼は玄妙の、妹、閑路といふ者ぞ」と、言へ

ば初糸「此乙女は、位ある者なるや」。「いやとよ彼は玄

妙に、付きしのみにて位もなし」と、玉章が答ふるとこ

ろに、初糸が妹、色糸は、先よりこゝに居あはせしが、此

時やがて腕まくりし、膝立てなほし言ひけるは、「彼奴

が何の故をもて、かくまでに広言吐くや。困居し給ふ方々

の、内には人もなげなる言ひぶり。思ふに彼は位もな

き、下衆女と見へたるに、舌長なる今の一言。ひと拳の

手の内を、くれて頤叩き鐘、はつち坊主よ乞食女」と、

拳を固め振り上ぐるを、滝夜刃急ぎおし止め、「やよ待

ちねかし色糸ぬし。あれなる乙女かくの通り、△印へ

△印より口広く罵るからは、覚えなくてはかなふまじ。

まづ試みに戦ひの、庭へ出だしつしかして後、もし勝た

ざればその時に、よし打ちなりと突きなりと、○中へ

○下よりなし給ふとも遅からじ」と、止むればいよ、急

きのほし、顔紅の色糸は、「御身が言葉極めてよからず。



(34ウ・35オ 色糸、関路の広言に立腹)

賤しき下衆女房を、もの／＼しげに戰場へ、出だして戦はするときは、華籠がために我が輩は、人を見ることをなしえぬものと、辱め笑はるゝ、その嘲りはいかばかり」と、言はしもたてず滝夜刃姫、「そは御身が僻事よ。関路とやらんが品形、とりまはしをよく見給へ、凡人ならぬところあり。華籠いかでこの人は、位なき者なりと、いふことを弁へ知らんや。御身が料簡極めて狭し」と、言へば関路もかたはらより、「我華籠が頭を斬らずは、その時にこそ我が頭を、次へ(34ウ・35オ)／続き芻ね給ふとも恨みはせじ」と、言ふに滝夜刃うちほう笑み、かたはらを見返りつ、軍卒に言ひ付けて、酒を暖めさせらたれば、「その酒一碗持て来よ」とて、一碗を関路に与ふるを、関路はこれをひと息に、飲み干して立ち上がり、「いま一碗の爛酒を、汲みてこゝに置き給へ。我その酒の▲□／▲□冷えざるはしに、たち帰らん」と言ひ捨てて、青龍丸の長刀を、小脇に挟み走り行く。人々は外面に当たりて、関の声鼓の音に、大地も裂くるばかりなるに、驚きて耳そばだて、軍卒に下知をなし、関路が

(35ウ・36才 関路、華籠の首を持参する)



罵る物首の、至るところを聞かせんとて、かの軍卒を遣はしたるに、その者いまだ柵外へ、至らぬはしに華籠の、首ひつ提げてたち帰る、関路はその首地上になげうち、につこと笑ひて立ちたりしが、かの酒いまだ暖かなれば、かつ驚きかつ喜ぶ、人々の中をおし分けて、飛鳥は席に躍り出で、「姉御お手柄でかされたり。祭の喧嘩を見しごとく、引物の華籠を、

八の巻へ (35ウ)

(八)

七の巻より何の苦もなく踏みつぶし、傘鉾の頭引き抜き、地に投げつけたる勇み肌、手古舞めきたる手際あり。此期を抜かず都へ踏み込み、董根おばアを生け捕りて、しめろやれこの人外めに、痛き目見するも心やり、木遣り音頭は我が身なり。続け人々又いつを、便々だらり待ちてをらん」と、いきり切つたる長槍に、あたりは危なき鼻の先、耳元に割れ鐘の、響くがごとき大声にて、色糸は叱りつけ、「こやなうおのれ此席に、困居せられし歴々の、女房たちすらへりくだり、おし譲られてひと言を、宣ひもせられざるに、唄の守の手につきたる、下衆女の分際もて、さばかりいまれ勇むこと、言ふに堪えたる痴れ者よ。われ又おのれを幕の外面へ、追ひ出だしくれんず」とて、立かゝるを滝夜刃が、◆／＼「こははしたなし、色糸ぬし。一度ならず二度三度、その雑言は聞苦し。功ある者を褒美するに、貴き賤しきの次へ」▼右下に「華籠が首」(36才)／「続きけちめあらんや。いらざる御身が差配也」と、言へば色糸不興顔にて、「さや

うに御身ら◇／◇最負して、唄守つれをもてなし用ひば、わなみはこゝを避け帰らん」と、言ひ捨て立つに滝夜刃も、「いかでかたゞひと言もて、大事をば誤らんや」と、玉章に目をくはし、玄妙・関路・飛鳥らを、伴はせつゝおのれゝが、陣屋に帰しやりければ、その夜多くの女房も、散りゝに退出けり。滝夜刃は忍びやかに、腰元を使ひとして、その夜酒肴をもたらしやり、三人の者を慰めけり。

それはさておき、華籠が手下に従ふ、敗軍ばら御殿に來たりて、利あらざる戦の模様を、逐一に聞くふるにぞ、**【李肅】**これを取り次ぎて、董根に言ひあぐれば、董根慌て否**【李儒】**と、調布とを招き寄せ、そのことを語らへば、否はとりあへず、「今大切な華籠に、討ち死にをさせ敵兵に、勢ひをつけたるは、全く初糸惣大将となりてもろゝの悪者を、集めしがなす所也。」**【袁隗】**左より初糸が叔母也ける、紀の長谷雄が妻槐**【袁隗】**あらはに姫のかしづきにて、御殿にありてことを計らふ、これ裡応外合とて、こなたにとりてはたよりよからず。

(36ウ・37オ 折鶴・薄水、槐一家を殺害する)



まづはや彼を除くにしかじ。御身自ら大軍を、引きて出陣し給へかし」と、言ふに○下へ／＼○中より董根その言葉、理ありと思へばたちまちに、塵塚の折鶴【李催】、凍解の薄水【郭汜】といふ、手下の女を招き寄せ、軍兵数多を従はせ、槐が家のめぐりをば、十重二十重におつ取り巻き、老ひも若きも嫌ひなく、ことごとく殺し尽くさせ、しかのみならず槐が首を、切り取りて立ち帰る。すでにして董根は、おのれ自ら兵の、あらん限りを従へつ、これを二手に引き分けて、□／＼ひと手は折鶴・薄水に、預け相坂の関に向かはせ、みだりに斬り入ることをせしめず。今ひと手は、董根が嫁杏、玉川の調布ら、その他おち方の稠【樊稠】、からたうげ早濟【張濟】など、いふ女ともろともに、石部【虎牢関】の方へおし出だす。この所は東海道の、駅路にて諸方より、集まり来ぬる敵方を、遮り止むるに便りよし。調布は手勢を引ききて、醒井の寨に赴き、董根自らこゝにあり。さて又初糸が寨には、早馬来たりて此よしを、告ぐるを聞て数多の女房、次へ(36ウ・37オ)／＼続きうち集ひ



(37ウ・38オ 調布、筐と対陣する)

て語らふに、滝夜叉は座を抜き出で、「董根石部に屯を構へ、諸方より来たり集まる、味方の者を遮り止む。左  
 へ右よりしかれば味方は、兵を数多に引き分けて、ひと手がひと手に、向かふやうにぞ計りなん」と、言ふに初糸領きて、すなはち筐・橋立・鮑・遣水・文売、曾我菊・陶野・玉章らを、八手に分かちて石部に向かはせ、おのゝ敵に、向かはしむ。

滝夜叉は手勢を引き、その半途に行き来して、彼方此方を、下へ上より助け救はせたる程に、筐の前【王匡】は、先に手勢をおし出だせば、玉川の調布は、敵の向かふを見て大に喜び、陣頭に進み出で、迎へ戦はんありさまを、筐の前遥かに見やれば、丈なる黒髪を振り乱し、白綾の鉢巻き締め、連環鎖の着籠みを着し、上には唐錦の百花を織りたる、うち着をうち掛け、帯には紅絹のごきを用ひ、ひと振りの大長刀を、跨がりたる末摘花【赤兎馬】の、ひら首にさしつけて、風に嘶く名馬の勢ひ、あたりを払つて見へにけり。人の内には調布、馬の内には末摘花、人中の呂布、馬中の赤兎、その頃

ほひの稀ものにて、他には絶へてなかるべし。

筐かたみの前は此さまを見て、心の内恐れを抱だき、あとを見返りて言ひけるは、「誰たれか場中ばなかに走り出で、戦ふものゝあるやらん」と、言ひも終はらぬその内に、槍やりうち振りて出づる者あり。筐かたみの前これを見やれば、方円けだま【方悦】といふ乙女なりしが、調布にゆき向かひ、遂に手もなく次次へ(37ウ・38オ)／続つき討たれたり。筐かたみの前は此さまに、馬を蹴立て、逃げ入りしかば、調布「得たり」と長刀取り延べ、直ちに斬り入り斬り立つれば、四方八方追ひまくられ、大敗軍はいたんとなりたれば、調布は軍兵ぐんべいの、中を斬り割り追ひ撃つさまは、人なき境さかひに入ることく、いと安らかに見へにけり。

後ろの方に橋立【喬瑠】・遣水【袁遺】、めい／＼手勢を引き来たり、筐かたみの前を助くるに、調布は彼方かなた此方こなた、三手に当たつて兵つはものを、まとめてやがて引き退しりぞく。こなたの三手は人多く、討たせにければ遠く退き、八頭かちつの女軍一所に集まり、「調布は勇婦にて、彼に敵たふ者なし」と、とり／＼評議する折から、物見の軍卒走り来て、「調布

陣を繰り出だし、戦ひを挑み候」と、言ふに八頭の女房ら、おの／＼自ら馬に乗り、もとの寨にたち帰り、また兵つわものを八手に分かちて、三上山みかみやまの麓におし出だし、遙かに調布が一群ひとむれの、陣中を望み見れば、旗の幟のぼり吹き流し、風に招き翻ひるがへり、真一文字まいちもんじに突き来た。金目貫きんめぬき曾我菊【張場】が、手下の女房片貝かたがひ【穆順】が、調布に渡りあふ。

調布長刀振り回し、たちまち片貝を殴り斬る。八手の女房心胆こゝろを、失はざるんなかりける。縮括むぢく文壳ぶんがら【孔融】が手下の乙女、武世たけよ【武安国】と呼ぶ者、陣頭に進み出で、「我が身主人に愛せられ、十年の恩を受くるものから、死をもてこれに報ひまつらん。いで／＼」と言ひながら、大なる掛矢かけやひき提げて、調布に向かふたり。調布はこれを見て、武世と渡り合ふこと数合すか、◇／◇調布がこむ長刀に、武世は腕たなひ斬りさげられ、掛矢かけやを大地にうち捨てて、逃ぐるを八手の女房たち、等しく来たりてこれを救へば、調布も○印へ／＼○印より引き退しりぞく。

八手の女房一同に、初糸によしを告ぐ。滝夜刃思案をめぐらし言ふやう、「調布が武勇当たる者なし。今十八



（38ウ・39オ 武世、調布に挑む）

手の女房たち、▲／▲中より二所に集まり商議して、調布・董根を擒にせん」との、評議区々なる所へ、走り使ひの者来たりて、調布が陣を進むるよしを、告ぐれば滝夜刃心得て、八手の人々を一つに合はし、調布に向かはしむ。調布は玉章が、陣を目がけて突きかゝるを、玉章剣をうち振りて、自ら迎へ戦ふたり。調布は目を見張り、声を放ちてかの長刀を、水車に振り回し、戦ふこと二三合、玉章は「敵はじ」とや、とく悟りけん慌てて逃ぐるを、調布は末摘花に、ひと鞭かれて追ひ来たる。此馬飛ぶこと風のごとく、すでに追ひ付き玉章の、背をめがけ突く長刀の、下かいくぐりて「さはさせじ」と、大声あげて罵るは、名にしおひたる飛鳥【張飛】也。

調布は玉章を捨てて、たちまち飛鳥に向かふを、飛鳥は、戦ふこと神意を搜り、戦ひたけなはなる所を、八手の女房飛鳥が槍法、次第に疲れ乱るゝを、見る調布、すこぶる精神をそへ、戦ふこと半刻ばかり、飛鳥はその性激しき女、大喝一声喚いてかゝれば、八手の女房、双方の争ひを見物するに、戦ひ五十合に至れども、いまだ勝



(39ウ・40オ 関路・飛鳥、調布と争う)

負を分かたざるに、関路【関羽】も怵へず青龍丸の、長刀を振り回し、調布めがけて薙いでかゝりつ。三人が争ふありさまは、丁字様にさも似たり。

すでに戦ふこと三十合、しかれども関路・飛鳥ら、かへつて調布が手練に及ばず。玄妙は此様子を見て、次へ(38ウ・39オ)／＼続き心秘かに思ふやう、「今我自ら手を下さずば、さらにいづれの時をか待たん」と、剣をうち振り飛びかゝり、調布めがけ斬つてかゝるを、しばらく支へたりけるが、三人に一人敵しがたく、戦ひやめて引退くを、「逃さじ、やらじ」と追ふ三人、八手の女房軍卒ばらも、等しく関の声をあげ、調布を追ひかくる。

■／＼調布は辛く逃げのびて、石部の陣へ引とりたり。

飛鳥はつらく敵陣を、仰き望めば西風に、翻りたる旗差物に、声張り上げて罵るやう、「彼処にくわん／＼と陣を立て、控へたるは他ならず、賊婦董根に疑ひなし。今調布を追ひたるに、彼は手強き所あり。まづかの賊婦董根を、捕らへんにしくことなし。

▲右の下へ／＼▲左よ

りこれ根を絶つて、葉を枯らすの道理」と、つぶやきな

から敵陣へ、突き入り突き入る一騎駆け。飛鳥が勇氣今にはじめず。しかれども敵陣より、射出だす矢先は雨のごとく、いかでか進むことを得ん。踵をめぐらし引かへす。八手の女房一同に、玄妙・閑路・飛鳥らの、黙あるを仰ぎたて、これを祝せしその後、使ひをもつて初糸の、もとへ詳しく知らするに、初糸聞いて大きに喜び、又堅田が方へ書簡をもつて、「兵を進め給へかし」と、言ひやりければ堅田は又、行舟・黄葉を引き連れて、まづ色糸が陣所に至り、色糸に対面なし、腰にさしたる軍扇を、抜き出だして地に描きつゝ、色糸にうち向かひ、「もと董根と妾が仲は、仇あるにあらねども、此度我が身を返り見ず、矢石を冒して戦ひつ、死をも厭はで戦ふこと、上は東の御殿の、御ために賊婦を討ち、下は御身が家門のために、仇を報ふにあらざるや。しかるを御身何人の、賢しらごとを聞受けて、兵糧を送り給はず、わなみに敗れを取らされしは、恨めしき心根よ」と、怨ずれば色糸は、いと恥ぢらひたる面持ちして、怖れくて言葉もなく、そのまゝ彼の賢しらせし、者を人して斬り

殺させ、堅田が為に託びたる後、酒の甕を開きつゝ、もてなさんとしたりし所へ、堅田が僕走り来て、「たゞ今いつかたの者なるか、使者と思しき女房の、御主人に見参と、陣屋の外面に立れたり。いかにはからひ候はん」と、〇／〇伺へば堅田はそのまゝ、色糸に暇を告げ、おのが陣屋に帰り来て、かの使者に対面す。かの人は是すなはち、董根が愛する所の、塵塚の折鶴【李催】也。堅田は襟をかき合はせ、一通りの口誼を述べ、「さて御身いかにして、我がこの陣所へ来ませしぞ」と、問ふに折鶴答へて言ふ、「妾来つるは他ならず、我が主人董根刀自の、敬ふ人は御身のみ。今妾を遣はしたるは、董根刀自に乙女子あり。御身の子息純友主【孫仁】に、娶せんとの心也。此こと受け入れ給はんや」と、言ふに堅田は

次へ（39ウ・40オ）／続きうち腹立ち、折鶴を叱りて言ふ、「こは聞くさへも腹立し。董根は天に逆ひ、道を弁へ知らざる女、東の御殿を傾けたるは、皆これがなすところ、我悉く彼が為に、親族の頭を刎ねて、獄門の木に晒し、もて天が下に謝せんと欲す。もし此言葉のごと

くならずは、我死するとも目を塞がじ。●／●いかで此逆賊と、親を結ぶの心あらん」と、いと声高に罵りけり。

〜此終はりの半丁は、作者新たに好みて描しむ。その故は此巻はじめより、女武者多く、実にご見物も同じ絵組みに、飽き給はんことを思ひてなり。めでたし〜。

墨川亭雪麿作(印)

香蝶楼国貞画(印)

(40ウ)



▼酒樽に「三國山」とある。

(40ウ)

《第四冊 後表紙封面》



▼奥目録「天保癸巳年孟春発行新神史」。前年のものとはほぼ同内容で、「癸巳」は入れ木と思われる。本作第三・四編を掲げるが、第四編上帙は天保五年、下帙は翌六年の刊行。

(かんだ・まさゆき 法学部准教授)